

## 小学図書館ニュース



★定期刊行物は終わる期間を予定しない刊行物です。年度が替わりましても、購読中止のお申し出がない場合、引き続きご送付申し上げます。  
★著作権法により、本紙の無断複写・転載は禁じられています。

平成30年1月28日発行 第1124号付録

©少年写真新聞社 2018

## なぜか節分といえは豆まき、鬼やらい

江戸川大学社会学部現代社会学科文化人類学・民俗学コース教授 斗鬼正一

節分といえは立春前日。でも節分とは文字通り季節の分かれ目です。だから元々、立春、立夏、立秋、立冬の前日はみんな節分。でもやはり冬が終わり太陽も生き物も生命力が蘇る立春は大事な境目。おまけに旧暦正月に近いから、一年の始まりとも考えられてきました。だからやはり節分といえは立春前日なのです。そして節分といえは豆まき、鬼やらい。でもなぜでしょう？

昼夜の境目の逢魔時と同様に、年の境目の節分もまた鬼が出没し、災厄に遭遇する逢魔の時。だから追儺、つまり霊力ある五穀の一つ大豆で鬼を打つ鬼やらい、豆まきなのです。さらには鬼が嫌うとげとげの柞の枝に臭い鱒の頭を刺して戸口に挟み、鬼を遠ざけたりもするのです。

こんな鬼やらいは中国の宮廷行事が平安時代に伝わったもので、大晦日の夜に黄金の四つ目の面と黒衣、朱裳を身につけた方相氏が、右手に矛、左手に盾を持ち、鬼を追い払ったのですが、室町時代頃には節分の夜に貴族、武士が豆をまいて鬼を追うようになり、江戸時代には庶民にまで広がりました。そして鉄道が発達した明治以降は、各地の寺社が次々参入、今や国民的行事となった

のです。

ただし節分行事といっても様々で、正月の厄除け祈願同様に、年の境目の節分に厄を落とそうと厄年の人が豆をまいたり、歳の数だけ豆を捨てたりするところもあります。東京では大正初期、節分の夜にふんどし、枕を四つ辻に捨てる人が続出し、警察が嚴重取り締まり、などということもあったのですが、これもたまたた厄を異界との境目たる四つ辻に落としてしまおうとしたのです。

豆まきの掛け声も、殿様の姓に鬼がつくから「鬼は外」は禁句とか、代わりに「鬼はご随意に」などと気を遣う「忬度型」、「わっはっは、わっはっは」と高笑いで鬼を退散させる「平和主義型」などがあります。

逆に「鬼は内」と招き入れてしまうのは、仏教の力で改心、更生させるとか、逃げてきた鬼がかわいそうと保護してしまう「福祉シエルター型」。さらにお祭りに鬼を集めて観光・町おこしという「経済効果型」、実利志向で鬼を味方にしてしまう「懐柔型」、鬼にも「悪魔外」と豆まきをしてもらう「人鬼共闘型」などもあります。さらには鬼こそは除災招福の神様だ、などという「鬼の金棒便乗型」まで存在するのです。

そもそも豆まきをしないという例もあり、姓が九鬼、斗鬼、鬼頭、鬼沢だから、自分の方が出ていかなければならなくなるとか、「豆腐屋だから大豆をまくなんてとんでもない、など」というのは「専守防衛型」。酒呑童子を退治した渡辺綱と同姓だから鬼が来るわけがないと高をくくる渡辺姓は「平和ボケ型」です。

また近年、まくとしても、北海道や東北、南九州などでは、雪の上でも拾いやすいとか、汚れないからと大豆の霊力返上で落花生をまくなどという地方もあります。

追うべき鬼も、鬼畜米英から脱した戦後は「軍国主義は外」、問題噴出の経済高度成長期となると「インフレは外」「交通戦争は外」「公害は外」、近年では「振り込め詐欺は外」などというのも登場し、鬼も世にこれ多様化が進んでいます。

しかし世の中どんなに変わろうと、人の世は憂いものつらいもの。いつなんどき不運が襲うかわからない。激しい妬み、嫉みで人の心も鬼になる。だからどんなに科学技術が進歩しようとも、鬼は出没し続けまます。だから形は変われども、鬼を追う節分行事もまた、人の世とともにいつまでも続くことでしょう。